

郷土室だより

第111号

平成13年10月15日

編集・発行

中央区立 京橋図書館

東京都中央区築地1-1-1

電話 3543-9025

刊行物登録番号 13-043

「続」中央区の「橋」

(その11)

◇「江戸前島」に掘られた川

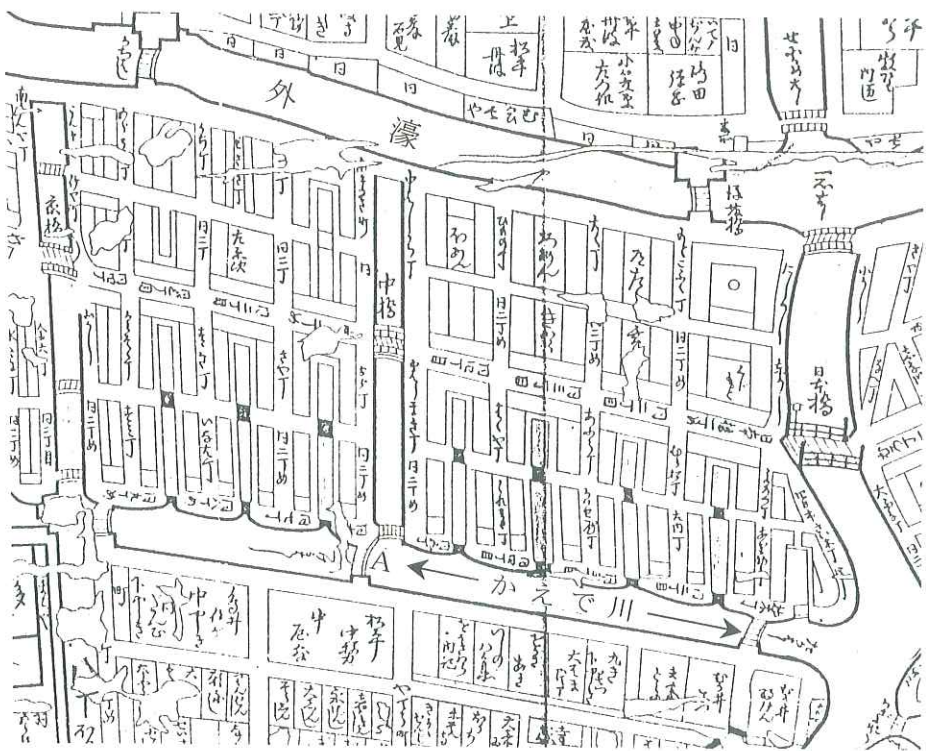
初めから古い話になって恐縮ですが、お手元のこのシリーズの(その3)。(平成十一年三月発行 第一〇三号)の表紙の地図を御覧ください。そこにはこれまで度々話題にしてきた「江戸前島」に掘られた運河が日本橋を中心に描かれています。

前号ではその外濠川に掛かった呉服橋から新幸橋までの八つ橋を紹介しましたが、この号ではその外濠川にほぼ直角に取り付けられた運河とそれに掛けられた橋を紹介していきます。

今は橋というものは川や水路の上を跨ぐものに限らず、陸橋というものが出現して多種・多様なものが造られています。高速自動車道路もこの一種だといえますし、歩道橋や、ビルとビルを繋ぐ橋など、橋の下に水がない橋が多く見られます。

しかし約四世紀前の江戸という都市ではその都市としての活動をするために、多くの運河が掘られました。当時の江戸ではその運河を「堀川」と呼んでいたことは第一〇三号で述べた通りです。

これも折りに触れて説明してきたように



寛永江戸図(寛永九年 一六三二)
「武州豊嶋郡江戸庄図」の部分に書きこみ

「堀川」がなぜ沢山掘られたかといえ、堀川」で代表される水路が当時の唯一の輸送手段だったためです。そして「堀川」が造られる場所の多くは、地盤のしつかりした、つまり堅い場所が選ばれているのが一つの特徴でした。

その理由は、東京下町低地のような沖積地では、ちよつと掘ってもすぐに水が湧いて、回りの土が崩れやすい場所では、ある程度以上の規模の土木工事は事実上不可能に近かったのです。今のようにシート・パイル（鉄矢羽根防水用の堰板）を打ち込む技術がなかったためです。

◇洪積地（しつせいち）が選ばれた

武蔵野台地の地表には富士・箱根火山の火山灰が厚く積もっています。地質学では「関東ローム層」と呼ばれる地層です。その下には東京層という比較的堅い地層があります。

そしてこの武蔵野台地の一部である本郷台地の先端部が神田駿河台、その先に銀座八丁目を越えて、JR新橋駅の東側のこれも元のJ

R汐留駅構内辺までの、低地が続きます。これが「日本橋波蝕台地」（これが歴史的地名としての「江戸前島」に当たる）と呼ばれる低地です。

なぜ「波蝕」したのかというと、約二万年ほど前の海進期の荒波に、台地の先が削り取られたものであり、現在での地理学では説明していませんし、汐留遺跡の発掘調査でも考古学の分野からも、それが立証されてもいます。

このような近代地理学の説明よりも先に、四世紀前の人々は土地の状態を良く観察して、大規模な土木工事の場所を選んでいました。観察と経験が技術の基礎を支えていた時代だったのです。この意味で「堀川」の分布を再検討してみると、実に合理的に城とそれを取り巻く町と、それを支える水路が選ばれていることが分かります。

◇外濠は平川のバイパス

幕府所在地としての江戸城の大規模な工事は慶長一一（一六〇六）年から始まりまし。その一番最初の工事は今のJR浜松町駅

辺を入り口とする日比谷入江の埋め立てから始められています。もちろん一度に埋め立てたわけではなく、差し当たって今の日比谷公園から皇居外苑までの浅い海を陸地化したわけです。

そのためにはこれも今の千代田区一ツ橋一丁目の丸紅ビル辺から日比谷入江に流れ込んでいた平川の水を、江戸前島に新しく水路を造って放流させることが必要になりました。その水路こそ外濠だったのです。堅い地盤のため両岸にすぐ物揚げ場を造ることができま

したし、後にその西岸に延々と石垣と三つの城門が築けたのです。同時に海上輸送されてきた築城の必要資材（石や材木）を、工事現場近くまで運ぶ「水路」にも利用されました。その機能は太平洋戦争後まで城辺河岸として続いたのです。

この城辺河岸に面した町が現在の八重洲一〜二丁目と銀座一〜八丁目だったのです。

◇横断運河紅葉川

この外堀からはほぼ直角に、江戸前

島を横断して「四本」の、海に通じる水路が付けられました。一番北側の現在の日本橋川のこと、一〇三号に書いた通りです。その次が今号で取上げる紅葉川です。

これを表紙の地図で見ると中央より少し左に寄った位置に描かれた「中橋」の絵が見られる水路です（Aの上の水路）。
そんな地名は！といわれる方が多いと思いますが、この名の由来については「御城内の紅葉山に発し、流れ巡って海に注ぐ」といった荒唐無稽な説明をした江戸期の地誌があります。江戸の人々、とくにこの付近の住人にとっては、このような「將軍さまのお膝元」であることを「さもさりなん」と納得させ、誇りに思う地名でもありました。

この様に、かつては広く知られた名であり、紅葉川の名は日本橋区立小学校と中央区立中学校の学

校名にも使われました（都立紅葉川高校だけが現存）。
その水路は現在の八重洲通りに相当します。この水路が掘られた当時は、現在の場所と地名というと、JR東京駅八重洲口から外濠

をこえて、日本橋三丁目交差点を経て、久安橋（これは現在の首都高速の宝町ランプ辺）までの水路でした。

そして久安橋を経て海に通じたのです。その後、その海の先に

「八町堀」埋立地ができて、江戸前島と「八町堀」の間に埋め残された水路ができると、それを江戸の人達は「楓川」と名付けています。楓が紅葉すると「もみじ」、逆に「もみじ」は楓の代名詞でもあります。どちらにしてもこの二つの水路は一体の関係にあったことを物語る洒落た命名だったわけですね。

◇紅葉川の橋

紅葉川の西半分は「東京駅～中央通り」間の水路は、比較的早い時期の正保年間（一六四四～四七年）に埋め立てられて、防火地帯としての中橋小路になっています。なお幕府の作った『御府内沿革図書』を見ますと、この水路の南に平行してもう一本の水路があったことが推定されます。「長崎町広小路」です（ほぼ現在の鍛冶橋交差点から宝町交差点までの

道路の北側に相当）。

この辺りの事情については『中央区沿革図集』（京橋篇）（中央区教育委員会 平成八年刊）に、きれいなカラーの当時の地図が掲載されていますので参照されることをお勧めします。

余談ですが、この長崎町広小路を作るために、それまでであった長崎町は霊巖島（現在の中央区新川の越前堀公園の辺）に移されています。

本題に戻って、この川に掛けられた橋は、古地図（寛永江戸図Ⅱ 一六三二年）の時点で確認される橋は、中橋と橋名のない橋の二つだけです。

中橋という橋の名のいわれは、多くの地誌には「日本橋」と「京橋」の間にある橋だから、中橋といったとあります。

これは説明としては無理のない説明ですが、もう一つつけ加えると、この中橋と京橋の間に南伝馬町があったことが案外忘れ去られています。

なるほど東海道の起点は日本橋だったでしょう。しかし実際の旅行は中橋南側の、その名も南伝馬

町一～三丁目から始まりました。

今年は東海道を始めとする五街道の宿駅制度が、慶長五（一六〇一）年に制定されてから四百年目だということで、方々で記念行事がありました。

この宿駅制度というのは、例えば東海道五十三次という具合に、間だけを往復する人足と馬のりレー方式による輸送の方法の制度のことです。

改めていうと、中橋南から京橋まで現在の中央通りの両側にあった南伝馬町一～三丁目の間に、ズバリと並んだ駅馬や人足の「立て場」があった「江戸駅」だったのです。

つまり初期の江戸の中橋は、水運の幹線だった紅葉川と、陸上交通の交差点だったのです。

しかし前記のように、この水路の西半分は正保年間に埋め立てられたのです。

◇紅葉川の埋立

中橋広小路ができて中橋が姿を消し、「通り町筋」Ⅱ現在の中央

通りから東側に残った水路は「紅葉川入堀」と呼ばれました。その入堀に掛けられた橋は、地誌によって表現が違いますが、東中通りに掛かった橋が、藍染川または愛相橋または中ノ橋。楓川合流点の材木町に掛けられた橋が紅葉橋、または鷹橋だったとあります。

その後、安永三（一七七四）年に入江の突き当たりを約二〇間埋め立てて、中橋広小路町が成立しています。古典落語の「錦明竹」に出てくる道具屋のいた町です。

さらに天保十四（一八四三）年から楓川を初め日本橋川筋の大規模な川浚いが実施されたとき、その揚げ土を処分するために三年がかりで紅葉川入堀を埋め立てて、弘化二（一八四五）年三月に完成させました。

そしてこの「埋地」を新肴場請負地として、和泉屋三郎兵衛の経営に任せました。

日本橋北東岸にある魚河岸の本質は、幕府ご用を勤める魚の集散場所としての性格のものでした。それに対して民間の魚市場は楓川の西岸に「新場」として成立しています。さらにそれだけではなく

幕府は紅葉川跡に「新肴場」を造り、その運営を民間に委託して上り(営業税)を徴収するようになったのです。

これは天保改革の継続ともいえるもので、魚の流通が官営的な河岸と民間業者の連合体が運営した新場と、純粹の個人責任による新肴場と経営の在り方が変化した事を示す場所でもあり、まさに紅葉川埋地は江戸の流通革命の発祥地ともいえる所です。

これも余談ですが、江戸っ子は事のほかに鯉、とくに初鯉を好んだことはよく知られていることです。芭蕉の有名な句に「鎌倉を生き出いでけん初鯉」があります。押し送り船(今なら「特急便」といったところ)で運ばれてきた初鯉は、「江戸橋はくぐらぬという松魚かな」という句の通り、初鯉は十八世紀初頭の元禄時代から江戸橋を潜って魚河岸には運ばれず、その手前を左に曲がって新場の魚市場に届けたのです。「御城御用」をカサにした官営的市場に初鯉は敬遠されたのです。

◇ 楓川とその橋

同じ寛永江戸図で楓川を見ますと、日本橋川寄りから海賊橋(のちに海運橋)、下野橋、弾正橋の三つの橋だけです。

ちなみに現在の高速道路の下にまだある橋は、これも日本橋川寄りから兜橋・海運橋・千代田橋。新場橋・久安橋。宝橋。松幡橋。

弾正橋の八つですが、橋の下の水路が埋め立てられたために、「埋没」したままで残されています。

高速道路の工事は橋を壊す手間を惜しんで、オリンピック東京大会に間に合わせるために、突貫工事が進められた結果でした。

順序が逆になりますが、寛永時代の楓川に掛けられた三つの橋は、橋の東側に作られた埋立地の「八町堀」と江戸前島を結ぶための橋でした。一番北の海賊橋の東には幕府の船手頭(海軍長官)の向井将監の屋敷を初め、水軍関係の役職の者の屋敷が立ち並んでいました。橋名は海賊取締を意味するものといえましょう。今の兜町一〜二丁目の辺です。

次の下野橋とは「下野守」を

名乗る大名が橋の東側にいて、その大名屋敷に行くための橋だったことが分かります。ところが地図には「松平中務 中屋敷」とあります。これは大名の名乗りが松平「下野」から「中務」に変わったのか、あるいは全く別の大名、つまり「下野」の居た屋敷に、幕府の屋敷替えの命令で松平中務が入った事を意味するものかも知れません。

さらに幕末になると、この屋敷は松平越中守(伊勢桑名藩)の中屋敷になっています。したがって橋の名も「越中」橋に変わっています。地図によつては「越中殿橋」と敬称を付けているものもあります。

それが明治になって廃藩置県になると久安橋と改められたのです。海賊橋が海運橋に改められたのも同じような理由でした。久の字はこの松平越中守の本姓は久松だったことによるものです。

最後の弾正橋も寛永江戸図にはその東側に、旗本の嶋田弾正の下屋敷があったためです。

現在のように行政区画というものがなく、住居表示といった制度

がなかった時代には、毎度繰り返すことなのですが橋の名は重要な「住居表示」の目印でした。

その橋に自家にちなむ名称を付けられるという事は、大変名譽な、しかも便利なことでした。寛永時代といういわば江戸開発期に、埋立地を割り当てられた大名や旗本には、先に見た向井将監のように、自分の職務上の理由で入居するものを始め、それぞれ特別な理由があったものと推察されます。ともあれ出来立ての埋立地へ幕府から入居を指定されたものは、まずそのアクセスを自前で造らなければなりません。

楓川に最初に掛けられた三つの橋は、それぞれの大名たちが自前でかけたものが始まりなのです。橋にはこのような掛けられ方と名称の付けられ方があったのです。

(鈴木 理生)